

2024年度 私の課題発表会 要旨集

令和7(2025)年 3月 8日(土) 10:00~12:30

放送大学群馬学習センター 第2、3講義室

共 催 放送大学群馬同窓会

放送大学群馬学習センター

目 次

挨拶 放送大学群馬同窓会会長	簗 輪 欣 房		1
挨拶 放送大学群馬学習センター所長	工 藤 貴 子		2
2024年度「私の課題発表会」次第			 3
課題発表			
1. 避難所における避難動物情報の把握の現状と避難動物ラピッドアセスメントシートの提案			
放送大学教養学部教養学科自然と環境コース			
			正木 恭子 さん 4
2. 小学校理科の教科書における問題の類型化と「問題を見いだす力の育成」に関する研究			
～小学校第5学年「天気の変化」の単元を事例にして～			
放送大学大学院文化科学研究科文化科学専攻人間発達科学プログラム			
			斉藤 貴司 さん..... 7
3. ネパール人留学生にとって日本留学とは何か			
－ 元留学生へのインタビュー分析からの一考察 －			
放送大学大学院文化科学研究科文化科学専攻人文学プログラム			
			田所 瑞絵 さん... 13
あとがき			 19

会長あいさつ

放送大学群馬同窓会 会長 簗輪 欣房



発表をされる方たちは、論文を書き上げて終えるまで大変なご苦勞をされたはずですが、同時にその試行錯誤の中で様々なことを経験し、多くのことを学ばれたのではないのでしょうか。この学びの意味や価値は今すぐには実感できなくても、後の仕事の中で、あるいは日常生活を通じてあらためて見出すことはあるのではないかと思います。

論文を書くということは、テーマを設定して計画を立てるところから始まります。文部科学省の「大学における教育内容等の改革状況について」によれば、大学において「論文・レポート作成支援」は初年次教育において導入している大学は93.5%にも達しています。放送大学においても「日本語アカデミックライティング」という授業科目が開講されていて論文についての指導を得ることができるようになっていきます。

論文を書こうとすると重要なのが独自の「研究テーマ」を考え、それを明確化することから始まります。この研究テーマはそれぞれの興味関心に従って設定されますが、最初はその輪郭がぼんやりとしていることから始まります。その後、教員からの指導と支援、仲間とのディスカッションを通じて研究テーマが目指すところが次第にはっきりしてきます。その時に、いろいろと研究テーマを構想して頭を悩ますことになりますが、自分なりに何を明らかにしたいのかをぶれないように考えてください。そして、研究テーマを次第に絞り込むプロセスで、少し大げさかもしれませんが、これだと思える「テーマの課題（問題点）、論点、争点」を立てたことで論文の半分は出来上がったと思えるようになります。

論文を書こうとする時に考えてほしいことがあります。研究というのはコツコツとひとりでするイメージがあるかと思いますが、一人で行っているものではないということです。先行研究を取り寄せて読む場合、それは同じように研究してきた先達との対話をしていると考えると共同性の営みなのです。さらに、論文を書くのを進める上で、指導される教員や同じような領域、分野を研究している仲間との忌憚のないディスカッションによって己の心を打ち碎かれることもあるかと思いますが、このジャブが何よりも大切であることを忘れないでください。今は打たれているジャブを今後は交わすためにも、様々な結果、エビデンスに基づいた自らの理論を構築する論理的思考をしっかりとさせる事が大切だと思えるようになります。井の中の蛙とならないためにも「真剣勝負のぶつかり稽古」のようなゼミナールを通じて、是非とも教員や研究している仲間と共に研究とは何かを学び、果敢にも挑戦してください。その成果を発表する場として同窓会は今後も群馬学習センターと協力して「課題発表会」を続けたいと思いますのでふるって課題研究、実践報告を論文にまとめて発表してください。

皆様のこれからの研究活動、実践活動が実り多いものになることを祈っています。

所長あいさつ

放送大学群馬学習センター 所長 工藤 貴子



日頃より群馬学習センターの活動へのご理解とご協力をありがとうございます。
ます。

この度、放送大学群馬同窓会会長を始め会員の皆様、また、群馬学習センターにかかわる多くの皆様のご尽力のおかげ様で、「私の課題発表会」を開催できることに深く感謝申し上げます。

今回は3人の学生さんのご発表です。ご所属は学部の「自然と環境コース」、大学院の修士課程では「人間発達科学プログラム」と「人文学プログラム」、そしてご発表の研究テーマもご所属の違いを反映して三者三様であり、聴衆の一人としては多様な内容を伺えることになりとても楽しみです。

言わずもがなですが、何か一つのテーマについて深く調べたり、新しい知見を得る作業は時間もかかり決して楽ではありませんが、その過程における様々な発見に気づいたときの喜びや、成果をまとめて公表できる時の達成感は、それまでの苦労をほぼ帳消しにして尚余りあるものになるかと思えます。そして、その成果を伺える発表会が、参加者にとっても多くの参考になる情報を頂けることで実り多い機会となることは間違いありません。

更に、発表者の皆様のご研究成果を論文とはまた別の公表媒体である発表報告冊子として記録に残すことは、ご本人は勿論のこと、一般の読者にとって大きな意味があると思います。今回の「私の課題発表会」とこの要旨集が全ての参加者や読者にとって群馬学習センター所属の学生さんの多様な学びの成果を知る手がかりとなり、更には、これから卒業研究報告書や修士・博士論文を作成予定の学生の皆さんの背中を押してくれることを祈念しております。

2024 年度「私の課題発表会」次第

日時： 令和 7 年 3 月 8 日(土)午前 10 時 00 分～

場所：放送大学群馬学習センター 第 2、3 講義室

共催：放送大学群馬同窓会 放送大学群馬学習センター

司会・進行 木村 一弘

【プログラム】

- | | | |
|---------|---|--|
| (10:00) | 開会
同窓会長挨拶
発表する上でのお願い | |
| (10:05) | 発表 正木 恭子 さん
質疑応答
客員教員からの講評
記念品授与 | 避難所における避難動物情報の把握の現状と避難動物ラピッドアセスメントシートの提案 |
| (10:50) | 発表 斉藤 貴司 さん
質疑応答
客員教員からの講評
記念品授与 | 小学校理科の教科書における問題の類型化と「問題を見いだす力の育成」に関する研究
～小学校第 5 学年「天気の変化」の単元を事例にして～ |
| (11:35) | 発表 田所 瑞絵 さん
質疑応答
客員教員からの講評
記念品授与 | ネパール人留学生にとって日本留学とは何か
ー 元留学生へのインタビュー分析からの一考察 ー |
| (12:15) | 工藤 学習センター所長 所感 | |

発表 1

避難所における避難動物情報の把握の現状と避難動物ラピッドアセスメントシートの提案

放送大学教養学部教養学科自然と環境コース

正木 恭子 さん

【概 要】

近年、動物愛護への気運が高まり、適正飼養のための法律改正も行われ、ペットを家族の一員と捉える考えが広く受け入れられている。一方、大規模災害時において被災した人々がペットのために避難を諦めたり、同伴避難ではないために十分な支援を受けられなかったりする人がある。本研究では、こうした人々の支援をするため、避難所での情報収集の現状やその方法について調査と検討を行った。

まず、避難所での動物の避難状況を調査するため、環境省が発行している被災動物対応記録集の自治体へのアンケートから、自治体ごとの避難所での犬・猫・その他の頭数把握を調査し、集計した。飼養状況については同アンケートや報告書から様子のわかる記載を抜き出しまとめた。それと同時に、情報収集ツールとして、被災者アセスメントシート、施設・避難所ラピッドアセスメントシート、同行避難動物登録票、避難動物台帳を精査、項目を検討した。

結果、集計とまとめから、正確な避難動物の頭数把握はもちろん、飼養状況の把握までできている自治体はほとんどなく、「同行避難」「同伴避難」の意味づけの曖昧さもあり、現状把握が難しい状況になっていると考えられた。そのため、本研究では既存のアセスメントシートに項目の追加を提案し、避難所でペットの同伴避難する被災者だけでなく、ペットのため避難所での生活を諦めた被災者の情報も汲み取れるような変更点を指摘した。さらに施設・避難所ラピッドアセスメントシートを見本とし、避難所での動物支援を迅速・的確に行うための避難動物ラピッドアセスメントシートを提案した。

はじめに

避難所における避難動物情報の把握の現状と避難動物ラピッドアセスメントシートの提案

所属 自然と環境コース
指導教官 奈良由美子教授
氏名 正木恭子

東日本大震災で犠牲になった多くのペット

- ・宮城県 犬約10,000頭、猫もおよそ同数が犠牲（公益社団法人宮城県獣医師会、2024）。
- ・岩手県 数千頭の犬猫などの家庭動物が犠牲になったと推測（多田洋枝、2013）。
- ・福島県 犬約2500頭が犠牲、猫は不明（環境省、2013）。

被災者と一緒に避難するペット

- ・東日本大震災では避難所を設置したと回答した145の自治体中、ペットと共に避難してきた被災者を確認している避難所があったと回答した自治体が64（回答があった自治体の44%）ある（環境省、2013）。

避難行動に影響を与えるペット

- ・2024年1月の能登半島地震では、同月24日珠洲市で、飼育動物があり、ペット連れでの避難所利用を遠慮して納屋で1人避難生活を送っていた男性の遺体が火事跡から発見された（北國新聞デジタル、2024）。
- ・避難先での動物の取り扱いに自信が持てず、ペットを残して避難したもののペットが気になり自宅に戻り、津波に流されて亡くなった（田中ら、2022）。
- ・避難者の避難行動に影響を与える項目として2番目にペット飼育がある（田中幸美ら、2022）。

先行研究からの提言

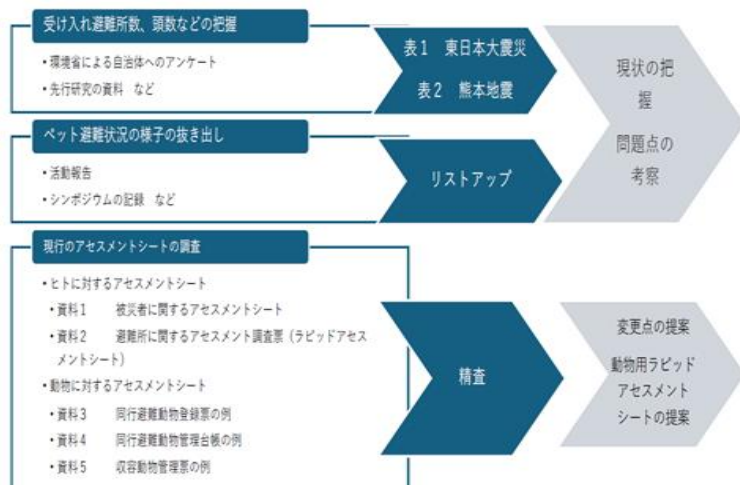
ペットを連れていくために避難を誘導するような事態を避けるために、避難動物を受け入れる側の準備が必要(田中ら, 2022)

命を守る同行避難後の飼い主の選択肢を支援することが必要（加藤、2022）

多様な遊憩形態や自宅飼育、人とペットの遊憩所以外への分散遊憩、一時預かりシェルターの利用など、飼い主ごとのチョイスへのインクルーシブな支援の必要性（加藤、2022）。

避難所でのペット対応の方法の共有化が必要（田中ら、2022）

2. 方法



方法

定義・意味

同行避難

・災害時に被災者がペットと共に安全な場所まで移動する避難行動。避難所等で飼い主がペットを同室で飼養管理することを意味するものではない。(環境省、2018b)

同伴避難

・遊覧した飼い主が、遊覧所でペットを飼養管理すること。「室内飼養」「室内別居」「施設所敷地内の屋外飼養」「車中飼養」なども含まれる。(環境省、2018b) (加藤、2022)

ラビッドアセスメントシート

・避難所を中心に周辺地域の被災状況やニーズを適切に把握し、防災・医療・保健・福祉のそれぞれの分野で横断的に調査する共通項目を整理し情報共有することで、迅速な支援の優先づけを可能とすることを目的に作成した避難所に関するアセスメント調査票（厚生労働省、2020a）

本研究の目的

ペット連れの被災者の様々な避難に対する支援を行えるようにする

自治体運営の一次避難所での現状
と情報収集の初期対応についてを
明らかにする



災害時のペット受け入れ体制につ
いて避難所格差をなくすため、避
難動物ラピッドアセスメントシー
トを提案する

表1 東日本大地震自治体避難所ベッド受け入れ状況表

[illegible]

表2 熊本地震の自治体避難所のベッド受け入れ状況

[illegible]

結果 表1、表2からの読み取り (一部)

ペット受け入れがあったとは
確認されているものの、その
正確な避難所数やそれぞれの
避難動物の数は把握困難・詳
細不明である

ペットが避難所内不可のため、
別枠での記載や受け入れなし
と記載される

同行避難は可能であったが、
同伴避難ができなかった

同行避難者が移動したため、
同行避難が確認された避難所
数が減った

受け入れを行わなかったと
た自治体で、避難動物の受
入れを行っている

カウントされていない受け入れ避難所や避難動物の存在

ペットとの車中泊の存在

環境省の巡回調査結果と自治体の把握状況が異なる

福島県に関しては避難区域の拡大に伴い、避難所から避難所への避難行動のため、他県と異なる避難状況であった。

結果

結果 報告書からの読み取り（一部）

ペット同行避難者を受け入れた自治体で、避難所でのペットの受け入れ方針が決まっていない、または受け入れを認めない自治体があり、避難者が室内に入らずペットと車中避難となった（環境省、2013）。	受け入れ避難所でのペットの飼育状況全体の把握ができなかった（多田、2013）	避難所の担当者がどこに動物と一緒に避難している避難者がいるか把握できていない（吉田、2018）	同行避難したが、避難所室内へのペット飼養不可、同行避難者が他の避難者へ配慮してペットと共に移動、ペットを自宅へ置いてきたという事例があった（環境省、2018a）
「同伴避難ができない」としていたが屋外専用スペースでの飼養を要請した（環境省、2018a）	発災当初に車中泊を考えたがいまだ理由として挙げた同率2位は「ペットと一緒にいられる」（46回答中11件）（環境省、2018a）	発災直後はペット同伴の避難が可能だった避難所が多く見られた（亀田ほか、2019）	

考察

受け入れ避難所の数の不明や避難動物の頭数が詳細不明など、情報不足

「同行避難」と「同伴避難」の混同があり、避難所スタッフ、避難者の混乱につながっている

同伴避難の飼養状況が不明であり情報不足

避難所での動物の受け入れ状況があいまいで、避難所スタッフ、避難者の混乱につながっている

自宅避難動物の飼養状況が不明で避難地域全体への包括的な支援が困難

環境省と自治体の状況把握の差異から情報伝達の滞りがあると思われる

提案

飼養動物の有無の項目の追加

- 被災者アセスメント調査票（資料1）で、ペット飼養の有無をチェックできるようにする
- 同行避難の有無の確認をできるようにする

ペット避難状況の項目の追加

- 同行避難動物登録票（資料3）にペットの避難状況と飼養状況へのアセスメント項目を追加する
- 文字記入部分を減らし、チェック項目に変更して記入コストを減らす
- 多頭飼い用に並列して何頭分か記載できるようにする
- ナンバリング、避難所利用の有無、狂犬病鑑札・済票番号、マイクロチップ番号、医療サポートの有無の項目を増やす

避難動物ラピッドアセスメントシートの作成

- 基本情報12項目は「施設・避難所等ラピッドアセスメントシート」（資料2）のまま、インデックスも統一した評価基準にする
- 避難所での飼養数の項目を追加する
- 飼養状況の項目を追加する
- 「過密度」「フード」「水」「トイレ」「ケージ」「医療支援」をA～Dの指標入力とする

まとめ

避難動物の状況

- 避難動物についての情報不足
- 状況把握の精密さ不足
- （ラピッド）アセスメントシートを利用した避難動物情報収集

課題

- データの収集方法、分析方法、データや情報を取り扱う際の注意点について
- 人的リソース軽減のためのアセスメントシートの項目の洗練
- 「同行避難」「同伴避難」のワードについての再検討

文献（一部）

- 加藤謙介（2022）『日本における『人とペットの災害対策』をめぐる課題と展望－『包摂』『連携』『対話』『情報』の観点から』自然災害科学JJSNDS 41-3 pp245-300
- 亀田由香利、船津敏雄、今本成樹、山本和弘、濱野佐代子、佐藤衆介（2019）『災害時における動物保護を考える－アニマルラブフェスタ2017 in TEIKAでのシンポジウム記録－』帝京科学大学紀要Vol.15 pp225-234
- 環境省（2013）『東日本大震災における被災動物対応記録集』https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/h2508c/full.pdf（2022年7月12日更新）（2024年7月25日閲覧）
- 環境省（2018a）『熊本地震における被災動物対応記録集』https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/h3003/full.pdf（2024年7月25日閲覧）
- 環境省（2018b）『人とペットの災害対策ガイドライン』https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/h3002/0-full.pdf（2024年7月25日閲覧）
- 厚生労働省（2020a）『令和元年度医療・保健、福祉と防災の連携に関する作業グループにおける議論の取りまとめについて（情報提供）』<https://www.mhlw.go.jp/content/000627849.pdf>（2024年7月29日閲覧）
- 佐藤れえ子（2012）『東日本大震災における伴侶動物の救護活動』『日本獣医師会雑誌』65巻3号 pp156-160
- 田中奈美、沼田宗純（2022）『災害対応検証報告書におけるペットに関する課題分析を踏まえた組織べつ々の災害対応業務フローの構築－川崎市を事例として－』地域安全学会論文集
- 多田洋悦（2013）『東日本大震災における動物救護活動の取り組み（1）：岩手県獣医師会の東日本大震災における動物救護活動の取り組み』『日本獣医師会雑誌』66巻2号 pp 85-90
- 内閣府（防災担当）（2016）『避難所運営ガイドライン』（2022年4月改定）https://www.bousai.go.jp/taisaku/hinanjo/pdf/1604hinanjo_guideline.pdf
- 藤本順介編（2018）『VIMAT標準テキスト改訂二版』災害動物医療研究会発行
- 吉田由紀子編（2018）『災害動物医療－動物を救うことが人命や環境を守る－』羽山伸一監修 株式会社ファームプレス

発表 2

小学校理科の教科書における問題の類型化と「問題を見いだす力の育成」

に関する研究

～ 小学校第 5 学年「天気の変化」の単元を事例にして ～

放送大学大学院文化科学研究科文化科学専攻人間発達科学プログラム

齊藤 貴司 さん

【概 要】

本研究では、問題を見いだす局面における授業実践を行い、児童の思考の変化を明らかにした。その授業から得られた知見を基に、問題を見いだす力の育成に関する授業方略を提案することを第一の目的とした。そこで、小学校第 5 学年「天気の変化」の単元において、授業実践を行なった。小学校理科授業における問題を見いだす力の育成では、まず、児童の実態を調査するため、個人思考の時間を確保し、児童が問題の見いだしを行なった。この調査では、児童が問題を見いだす時には、「Why」型の問題が多くなるということが明らかとなった。さらに、令和 4 年度実施の全国学力・学習状況調査で示されてる授業改善の視点（1. 比較の考え方を働かせ、個人で問題を見いだす 2. 教師が実証性について説明する。 3. 実証性に着目し、対話的な学習を通して、個人で見いだした問題を基に、新たな問題を見いだす。）を基に授業実践を行うと、個人思考の段階では、多くの why 型の問題が考えられたが、話し合い後では、科学的に解決することのできる How 型や Yes/No 型の問題に再設定できた。その理由として、2つ考えられる。一つ目は、「実証性」を基に自分たちで見いだした問題を振り返り、話し合うことで、実験・観察の見通しを持つことができ、観察・実験で検証することができる問題とできない問題に気づいたことである。二つ目は、科学的に解決していくことができる「How」型や「Yes/No」型の問題を検討していく中で、具体的な観察の方法を見通し、検証できるかどうかを基準として、対話的に問題を再設定できたことである。

さらに、科学的に解決することのできる問題と各学年の育成を目指す問題解決の力について関係性を明らかにしたいと考え、教科書を分析し、問題の種類と育成を目指す問題解決の力との関係を明らかにすることを第二の目的とした。小学校理科の教科書における問題の設定の局面で示される『問題』の類型化を行うと、理由や背景を問う問題（「Why」型の問題）は、22 個（内訳：第 3 学年では 4 個、第 4 学年では 6 個、第 5 学年では 2 個、第 6 学年では 10 個）であった。教科書に掲載されている「Why」型の問題が全体の問題の約 4%であることから分かるように、児童の発想しやすい「Why」型の問題を大切にしながらも、そのままクラスの問題として設定するのではなく、再度、実証性を意識した問題を設定しなければならないことが重要であることが明らかとなった。

分析した結果、第 6 学年で多く掲載された個別の情報を問う問題（「When・Where・Which・What」型の問題）は、「より妥当な考えをつくりだし、表現する力」の育成がしやすい問題である。第 4 学年で多く掲載された状態を問う問題（「How(状態)」型の問題）は、「根拠ある予想や仮説を発想する力」の育成がしやすい問題である。第 5 学年で多く掲載された方法を問う問題（「How(方法)」型の問題）は、すべて、従属変数は問題の中に示されており、独立変数を探究していく問題となっている。このことからわかるように、「How(方法)」型の問題は、「予想や仮説を基に、解決の方法を発想し、表現する力」の育成がしやすい問題であることが明らかとなった。

研究題目

小学校理科の教科書における問題の類型化と
「問題を見いだす力」の育成に関する研究
～小学校第5学年「天気の変化」の単元を事例にして～

放送大学院 岩永ゼミ
齊藤 貴司 (221-800006-6)

研究指導責任者 岩永 雅也 教授
研究指導担当 伊東 毅 教授

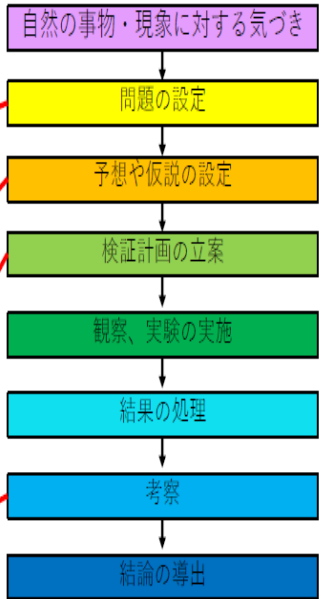
1 研究の背景と目的

第3学年
主に差異点や共通点を基に、問題を見出す。

第4学年
主に既習の内容や生活経験を基に、根拠ある予想や仮説を発想する。

第5学年
主に予想や仮説を基に、解決の方法を発想する。

第6学年
主により妥当な考えをつくりだす。



2

令和4年度全国学力・学習状況調査



益田 (2019) は、「すべての授業は問いからはじまる。めあても課題も問題も表現は異なるが、ひとつの学習のはじまりは問いである。」

深谷 (2021) は、「何を明らかにするのが明確になっていない「問い」は、その後の過程においても、何をどのように進めてよいかかわからず、最終的に目的に沿った探究活動が進められなくなってしまう。」

中山・猿田 (2015) は、「小学校理科の問題解決の質を授業レベルで改善しようとするとき、問題解決の鍵となる『問い』への注目を外すことはできない。なぜなら、『問い』が問題解決活動で児童が何を取り組み、教師が何を支援するのかを決定するからである。」

本研究の目的

①問題を見いだす場面における授業実践を行い、児童の思考の変化を明らかにしていく。その授業から得た知見を基に、問題を見いだす力の育成に関する授業方略を提案すること。

②小学校理科の教科書における問題の設定の局面で示される『問題』の類型化を行い、「問題の種類」と「各学年で育成を目指す問題解決の力」の関係について、教科書の具体的記述から明らかにすること。

2 小学校理科授業における問題を見いだす力の育成 小学校第5学年 天気の変化の単元を事例にして



視点①

自然の事物・現象から得た情報を、他者の気づきの視点で、分析して、解釈するには、比較の考え方を働かせながら、差異点や共通点を捉えていくことが大切である。

視点②

実証性、再現性、客観性などといった科学の基本的な条件を意識することも大切である。

視点③

児童同士が話し合う中で、比較の考え方を働かせながら、自分や他者の気づきを基に、差異点や共通点を捉え、新たな問題を見いだしていくような場面を設定する。

2.2 調査対象・調査方法

「天気の変化」の学習において「問題の設定場面」を抽出し、ビデオによる授業記録とその分析、児童のワークシートの記述分析を行った。
対象は、**埼玉県公立小学校第5学年1学級35名**に対して授業及び調査を行った。

2.3 調査期間

2022年4月～5月

2.4 単元名

天気の変化

検証授業は、第1時・第2時

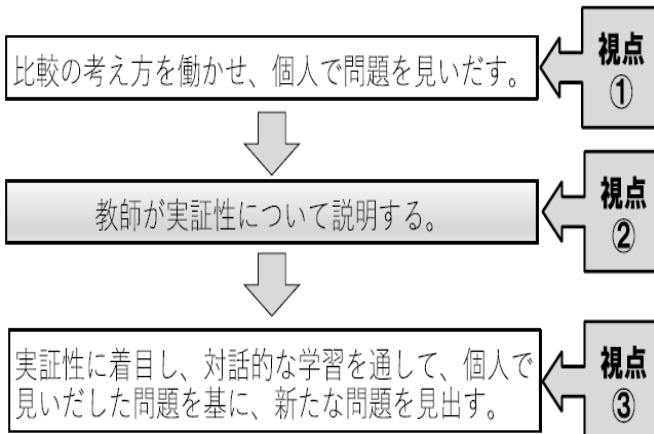
第1時	学習内容 空の様子を比べて、どんなことに気づくだろうか。(個人思考)
	目標 朝の空の写真と昼の空の写真と比較して、差異点や共通点を基に、問題を見だし、表現することができる。
第2時	学習内容 空の様子を比べて、どんなことに気づくだろうか。(他者との交流→問題の再設定)
	目標 個人で見出した問題を基に、児童同士で交流しながら、実証性に着目して新たな問題を見だし、表現することができる。



2.6 検証授業の実際

検証授業は、以下のように実施した。まず、天気について知っていることを児童から引き出し、意見の交流を行った。その後、個人思考の時間を確保し、**A県B市の朝の空の様子と昼の空の様子を比較し、問題を見出した(視点①)**。その後、教師が、**実証性の視点を説明を行った(視点②)**。実証性に着目し、児童同士が話し合う中で、**自分や他者の気づきや疑問を基に、新たな問題を見出す活動を設定した(視点③)**。

授業改善の3つ視点を基にした授業モデル



2.7 結果

朝の空の写真と昼の空の写真を提示し、比較の考え方を働かせ個人で見出した問題

番号	個人で見出した問題	分類	番号	なぜ、朝より、昼の雲の方が雲がたくさんで来ているのだろうか。	Why
1	なぜ、天気はくもりに変わるのだろうか。	Why	19	なぜ、朝より、昼の雲の方が雲がたくさんで来ているのだろうか。	Why
2	なぜ、雲がここにきたのか。	Why	20	無回答	無回答
3	なぜ、基ごろの方が青空が多いのか。	Why	21	なぜ、朝の空は雲がないけれど、基ごろには雲があるのか。	Why
4	無回答	無回答	22	なぜ、雲は触れないのに、透明ではないのか。	Why
5	無回答	無回答	23	日差しは、朝と昼では、どちらが強いのか。	Which
6	無回答	無回答	24	雲は、風が吹いてないとしたらどのように動いているのだろうか。	How
7	なぜ、朝に雲がないのか。	Why	25	雲は太陽と関係があるのか。	Yes/No
8	雲は、どこから発生しているのか。	Where	26	無回答	無回答
9	なぜ、基になつた雲が出てきたのか。	Why	27	なぜ、雲はゆっくりと動いているのか。	Why
10	無回答	無回答	28	なぜ、基ごろの方が雲が多いのか。	Why
11	なぜ、基になつた雲が出てくるのだろうか。	Why	29	無回答	無回答
12	無回答	無回答	30	雲の動きに規則性はあるのだろうか。	Yes/No
13	雲はどこからやってきたのか。	Where	31	無回答	無回答
14	無回答	無回答	32	なぜ、基になつた雲が出てきたのか。	Why
15	なぜ、雲は動くのだろうか。	Why	33	なぜ、朝は雲がないのか。	Why
16	なぜ、朝に雲はないのに、基になると雲があるのだろうか。	Why	34	無回答	無回答
17	なぜ、基の空には、雲があるのに朝の空には雲がないのか。	Why	35	無回答	無回答

教師が実証性の視点を示した後、交流時の発話記録を示したものである。この発話記録によりプロトコル分析を行い、実証性の視点を示すことが児童の思考にどのように影響を及ぼすのか検証を行った。

S_{A1}: 雲と太陽の位置は、関係しているか、これは無理だな。さすがに、見ているだけじゃわからない。① インターネットを使えば、わかるかもしれないけれど。②
S_{B1}: 雲がどこから来るのかも、見ているだけじゃわからない。③
S_{C1}: 僕は、大体、問題が4個ぐらいになった。実験できるもの。④
T₁: 4つになったんだ。どんなふうに観察、実験すればいいの?
S_{C2}: 規則性は、時間ごとに見ていればわかる。⑤
どのように動くかも、見ていればわかる。1時間ごとに見ていればわかると思う。⑥

実証性に着目した話し合いの後に見いだした問題

見いだした問題	分類
雲は、どのように動いているのだろうか。	How
雲の動きに規則性はあるのだろうか。	Yes/No
時間によって雲の量は変わるのだろうか。	Yes/No

教師が、**実証性の視点を示し、対話的な活動**を行なった後では、How型とYes/No型の問題を児童が見いだした。

How型の問題は、「雲は、どのように動いているのだろうか。」という

班での話し合いでは、時間ごと観察すればよいという観察の見通しに関する発言も見られた。これは、教師が**実証性**に着目することを児童に働きかけたからだと考えられる。

雲の動きを観察することで、規則性があるのかわかるのかを探究することのできる問題である。

Why型の問題はつくり変えることができたが、検証可能な問題であればなんでもよいということではない。

各学年の育成を目指す「問題解決の力」と「問題」には、どのような関係があるのか明らかにしたい。

2.8 考察

教師が、**実証性の視点を示し、対話的な活動**を行なった後では、How型とYes/No型の問題を児童が見いだした。

How型の問題は、「雲は、どのように動いているのだろうか。」という雲の動きという変数を探究していく問題である。

Yes/No型の問題は、「時間によって雲の量は変わるのだろうか。」という「時間の変化」という独立変数によって、「雲の量」という従属変数を探究していく問題である。

Yes/No型の問題である「雲の動きに規則性はあるのだろうか。」は、雲の動きを観察することで、規則性があるのかわかるのかを探究することのできる問題である。

本研究で示した授業モデルである「①**比較の考え方を働かせ、個人で問題を見いだす** ②**教師が実証性について説明する。** ③**実証性に着目し、対話的な学習を通して、個人で見いだした問題を基に、新たな問題を見いだす。**」を問題を見いだす力の育成に関する**授業方略として提案**する。

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説理科編をある程度反映していると考えられる、全国で使われている教科書5社を分析する。

量的分析・質的分析

より理科授業で妥当な問題の傾向を明らかにしたい。

3 小学校理科の教科書における問題の類型と問題解決の力の育成 -教科書5社を比較して-

先行研究 本田ら(2022)

検証可能な「問い」が増加している

「呼びかけ」のような検証が難しい「問い」は減少している

いるでしょうか、いるのでしょうか、かわるのでしょうか、つたわるのでしょうか、なるのでしょうか、もがうのでしょうか、できているのでしょうか、変化するのでしょうか、変わるのか、あるのだろうか、同じだろうか、必要だろうか、するだろうか、いるのだろうか、増えるのだろうか、できるのだろうか、とがすのだろうか	はい・いいえ (yes/no)
どのように、どう	どのように (how + 動明)
どのような	どのように (how + 名詞)
どこを、どこへ、どこに、どこで、どの部分、どのようなところで	どこ (where)
何に、何を、何で、何	何 (what)
なぜだろうか、なぜでしょうか、どうしてだろうか	なぜ (why)
	いつ (when)
どうしたら、どのようにしたら、どうすれば	どうしたら (so, if 手紙)
どのくらい、何でくらい	どれくらいか (how 量)
「何へ」が書かれていない観察・実験等	呼びかけ その他

3.1 本研究の方法

「5W2H」(Why・When・Where・Which・What・How(状態)・How(方法))と「Yes/No」、「その他」に当てはめて分析し、各学年の傾向をつかむこととした。

単元名	太陽の光を調べよう
How (状態)	日なたとの地面と日かげの地面では、あたたかさはどれくらいがうだろうか。
How (状態)	かがみではね返した日光は、どのようにすすむのだろうか。
Yes/No	かがみではね返した日光が当たったところは、あたたかくなるのだろうか。
How (状態)	虫めがねで集めた日光が当たったところの明るさやあたたかさは、どうなるのだろうか。
単元名	音を出して調べよう
Yes/No	音が出るとき、物はふるえているのだろうか。
Yes/No	音が大ききときと小さいときとで、物のふるえ方はちがうのだろうか。
Yes/No	音が伝わるとき、物を伝えるものはふるえているのだろうか。

分析の際に使用したカテゴリー表

Yes/No	「はい・いいえ」を問う問題
When・Where Which・What	個別の情報を問う問題
Why	背景や理由を問う問題
How (方法)	方法を問う問題
How (状態)	状態を問う問題

3.2 結果 表 各カテゴリーと問題数(個)

	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	全体
「はい・いいえ」を問う問題	35	44	35	31	145
個別の情報を問う問題	44	23	40	70	177
背景や理由を問う問題	4	6	2	10	22
方法を問う問題	9	5	12	8	34
状態を問う問題	58	95	34	59	246
全体	150	173	123	178	624

χ^2 検定を行った結果、有意な差が生じた($\chi^2(12) = 53.679, p < .01$)。残差分析の結果を示す。

	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
「はい・いいえ」を問う問題	0.032	0.805	1.529	-2.175*
個別の情報を問う問題	0.302	-5.173**	1.141	3.837**
背景や理由を問う問題	-0.654	-0.048	-1.275	1.790
方法を問う問題	0.341	-1.744	2.349*	-0.664
状態を問う問題	-0.218	4.904**	-2.984**	-2.027*

	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
「はい・いいえ」を問う問題	0.032	0.805	1.529	-2.175*
個別の情報を問う問題	0.302	-5.173**	1.141	3.837**
背景や理由を問う問題	-0.654	-0.048	-1.275	1.790
方法を問う問題	0.341	-1.744	2.349*	-0.664
状態を問う問題	-0.218	4.904**	-2.984**	-2.027*

資質・能力を育成する学びの過程
(問題解決の過程)

第3学年
主に差異点や共通点に基づき、問題を見出す。

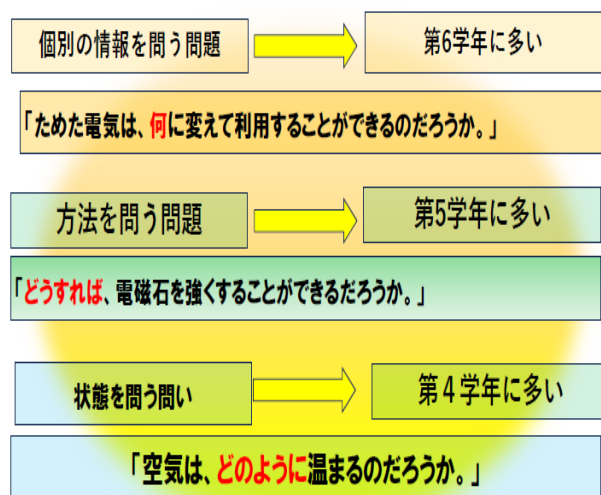
第4学年
主に背景や生活経験を基に、解決の仮説を考案する。

第5学年
主に予想や仮説を基に、解決の方法を考案する。

第6学年
主により妥当な考えをつくりだす。



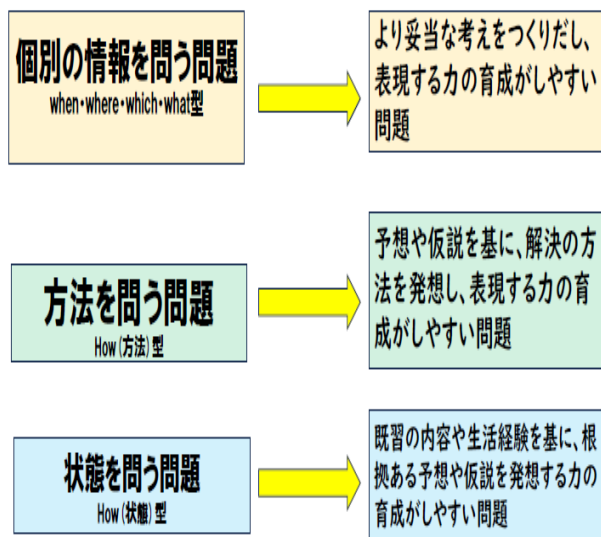
3.3 考察



4 結論



- ①比較の考え方を働かせ、個人で問題を見いだす。
- ②教師が実証性について説明する。
- ③実証性に着目し、対話的な学習を通して、個人で見いだした問題を基に、新たな問題を見いだす。



問題解決の力を育成 できる理科授業

どのような問題解決の力を
育成したいのか意識し
た問題の設定

問題の系統性

教科書の比較

実証性が担保された問題
の設定

①比較の考え方を働かせ、個人で問題を見いだす

②教師が実証性について説明する

③実証性に着目し、対話的な学習を通して、個人で見
いだした問題を基に、新たな問題を見いだす

発表 3

ネパール人留学生にとって日本留学とは何か

－ 元留学生へのインタビュー分析からの一考察 －

放送大学大学院文化科学研究科文化科学専攻人文学プログラム

田所 瑞絵 さん

【概 要】

本研究の目的は、ネパール人留学生が日本留学の意味をどう捉えているかについてインタビュー調査の分析を通じて明らかにし、彼らの課題と彼らを受け入れる日本社会や教育関係者ができることを考察することである。

近年日本におけるネパール人留学生の数は急増しており、留学後日本で就職を果たす例も多いが、その留学経験の意義に着目した研究は少ない。本研究では、まず先行研究を中心にネパール人日本留学生の特徴と課題を明らかにする。次にネパール人元日本留学生へのインタビュー調査を行い、質的研究法である「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA)」を用いてその経験を分析し、考察した。

分析の結果、次のストーリーラインを描き出した。ネパール人日本留学生は、親戚や友人に日本留学経験者がいるケースも多く【いい暮らしへの身近な選択肢】として日本留学を目指す。多言語環境で育つ彼らにとって異言語の壁は低く、渡日前に〈日本語はちょっと勉強する〉。そんな背景のネパール人日本留学生にとって【留学生活はサバイバル】であり、日本語学校による生活基盤作りやアルバイトが欠かせない。先生やネパール人仲間のサポート等に支えられて留学生活に奮闘するが、学習面ではネパールと日本の【学習観の違い】もあり、必ずしも日本語能力を向上させられない。これは、進学や就職時に【日本語の壁】へとつながる。留学生活を終え日本で就労、生活する中で、日本留学は概ね良いが 100%ではないという【冷静な自己評価】をする。将来については、ビザ更新の不安を抱えながら、日本のパスポート取得、ネパールへの帰国等の現実的な目標を持ち【希望と不安】が入り混じった思いで暮らしている。

上記から、ネパール人日本留学生にとって日本留学は生活に直結していることを念頭に置く必要があること、ネパールと日本の学習観の違いを乗り越えることが重要であること、日本語学習については、体系的に学ぶ第二言語として自律した学習を目指すことが大切なこと、進学に必要な日本語力について適切な情報提供が望まれること等が明らかとなった。

これら本研究の成果が、ネパール人日本留学生にとって留学生活をより有意義なものにし、また彼らと共生する日本社会の隣人、教育機関、そこで彼らと接する教師への示唆となることを期待する。

2. 背景と動機

- ✓ ネパール人留学生の割合が高い勤務校
- ✓ 日本語力が伸びる学生と、全然伸びない学生
- ✓ 大して勉強をしない学生
- ✓ 専門学校卒業後、日本語力が高かろうが低かろうが、多くが日本で就職し、日本での生活を継続

→ これは何なのだろうか？

ネパール人にとって日本留学の意味は何？

7

3. 目的と課題

- ✓ ネパール人留学生がどのような思いで日本留学を目指し、留学生活を送ったか、そして日本留学の意味をどう捉えているかをインタビュー調査と分析を通じて明らかにする。
- ✓ インタビュー分析を踏まえ、ネパール人留学生の課題と、彼らを受け入れる日本社会や教育機関関係者ができることを考察する。

8

4. 先行研究より： ネパール人留学生の日本留学背景

- ✓ ネパール国内の教育、雇用機会の不足
- ✓ 海外出稼ぎや留学の習慣
- ✓ 国内総生産（GDP）の約2割の額が出稼ぎによる海外送金
- ✓ 留学を斡旋するエージェント
- ✓ 日本政府の「留学生30万人計画」
- ✓ 日本語学校や専門学校のプロモーション
- ✓ 週28時間までのアルバイト就労が可能

9

4. 先行研究より： ネパール人日本留学生の特徴

- ✓ 日本で急増（2013年：3,188人¹⁾→2023年：37,878人²⁾）
- ✓ 留学生全体で2番目（2023年5月1日時点、全株279,276人のうち13.6%³⁾）
- ✓ まず日本語学校で1年半～2年学ぶ
- ✓ 日本語学校修了後、多くが専門学校へ進学
- ✓ 卒業後は日本企業で働くことを希望
- ✓ アルバイト就業率が高い
- ✓ 中長期にわたり日本滞在を希望する者が多い

10

5. 調査の設計：概要

日本で就労し生活する「元」留学生へのインタビュー調査

- ✓ 放送大学研究倫理委員会の審査
- ✓ 1:1（協力者：筆者）の半構造化インタビュー
- ✓ 各1時間程度
- ✓ 質問内容： 留学理由、日本での生活、日本とネパールの勉強の違い、日本語学校のサポート、進学について、就職活動について、価値観、将来の夢、留学の意味等

11

5. 調査の設計：期間、協力者

- ✓ 調査期間： 2023年12月～2024年6月
- ✓ 調査協力者： 勤務校の卒業生及びその家族 6名

ID	年齢	性別	現在の職業	日本語能力	来日時期	就学時期	母国語の学校	日本語の学校
A	35	男性	会社員	N3	2016	2023	高校	専門学校
B	31	男性	会社員	N3	2018	2023	高校	専門学校
							(大学中退)	
C	28	男性	会社員	N3	2017	2022	高校	専門学校
D	30	男性	会社員	N3	2017	2022	高校	専門学校
							(大学中退)	
E	32	男性	会社員	N3	2018	2022	高校	専門学校
F	27	女性	アルバイト・主婦	N3	2017	2021	高校	専門学校

調査協力者は、母国語にばかりつらいつまらないように感じていたが、しかし、女性の卒業生は就職や結婚で進学へ引継ぎしたり、子育てで忙しかったりして、協力者も得ることが困難だった。なお、2019年時点でネパール人留学生のうち女性は45.5%の割合に24名と27%と比較的少なく、実数としても女性が増えたとはいえない。女性も同様に求められる研究は今後必要としたい。

12

6. 分析の方法:M-GTA

- ✓ 質的研究アプローチである「M-GTA」(Modified-Grounded Theory Approach: 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ)を採用
- ✓ 人と人との関わり合い(社会的相互作用)の展開過程を理論化
- ✓ 実践的なヒューマンサービス領域の研究で多用
- ✓ 研究者を「研究する人間」として方法論化
- ✓ 抽象論の高い一般的な理論ではなく、領域密着理論を生成
- ✓ 「結果図」と「ストーリーライン」で表される分析結果

13

6. 分析の方法:M-GTAの手順

- ① 分析テーマ、分析焦点者を設定
- ② 逐語録から重要な箇所をバリエーションとして記入
- ③ 概念名、定義、理論的メモを書く
- ④ 更にバリエーションを抜き出す
- ⑤ ②～④を繰り返す
- ⑥ 新たな概念、定義が生成されなくなった段階で分析を終了
- ⑦ カテゴリー及びサブカテゴリーを生成
- ⑧ 結果図、ストーリーラインを作成

14

6. 分析の方法: 概念の生成例「みんなしてるから」

逐語録を読み「お姉さん(従姉)からも良い国、言われて、まあ日本に留学したほうが良いと思います。」という語りに注目

「分析ワークシート」に書き込み、同じような語りがなく、他のデータで同じような語りを探し、記入

先行研究からの知見や、気付いた点を「理論的メモ」に書き、定義を決め、概念「みんなしてるから」を生成

類似、対極の例等、データを比較検討し、概念を生成していく

15

6. 分析の方法:分析ワークシートの例

項目	記入内容
分析テーマ	ネパール元日本留学生としての日本留学の意味
分析焦点者	ネパール元日本留学生
逐語録	「お姉さん(従姉)からも良い国、言われて、まあ日本に留学したほうが良いと思います。」
概念名	みんなしてるから
定義	「お姉さん(従姉)からも良い国、言われて、まあ日本に留学したほうが良いと思います。」という語りに注目
理論的メモ	先行研究からの知見や、気付いた点を「理論的メモ」に書き、定義を決め、概念「みんなしてるから」を生成
類似、対極の例等	類似、対極の例等、データを比較検討し、概念を生成していく

16

6. 分析の方法: 理論的飽和化の判断

- ✓ 理論的飽和化 = 新たな概念が生成されない段階
- ✓ データ数6件
- ✓ 豊富なインタビューデータへの緻密な解釈作業
- ✓ 現実的、時間的な制約
- ✓ 一定条件下で得られる結果
- ✓ 女性のデータは今後の課題とする

17

7. 調査の結果と分析

- ✓ 分析テーマ:
ネパール元日本留学生にとっての日本留学の意味
- ✓ 分析焦点者:
ネパール元日本留学生
(日本語学校から専門学校等を経て日本で働き生活する
ネパール出身者)
- ✓ 28の概念、6つのカテゴリー、6つのサブカテゴリー生成

18

概念・定義・カテゴリ・サブカテゴリ			
カテゴリ	サブカテゴリ	概念	定義
いい暮らしへの身近な選択	—	もっといい暮らし	ネパールにいないと日本に留学した方がよい暮らしができると思う。
	最近も選択	みんなしてるから	周囲や友達に日本への留学経験者がいて、「みんなしてるから」自分も日本に留学する。
	—	お金を準備すれば	お金を準備すればエージェントが書類を作って、ビザを出してくれる。
	—	多言語環境	ネパールの親戚やネパール語とわかるが、他にも英語がわかる多言語環境。
	—	英語は小学1年から	父兄が熱心によって、又は学校によって英語の勉強の義務があるが、小学校1年生から英語を学ぶ。
学習の速い	—	英語は小学1年から	英語は小学1年生から英語を学ぶ。
	—	英語は小学1年から	英語は小学1年生から英語を学ぶ。
	—	英語は小学1年から	英語は小学1年生から英語を学ぶ。
	—	英語は小学1年から	英語は小学1年生から英語を学ぶ。

19

概念・定義・カテゴリ・サブカテゴリ			
カテゴリ	サブカテゴリ	概念	定義
留学生活のサバイバル	—	生活基盤作りは日本語学校	日本語学校のサポーターやホームステイ先、毎日生活の衣食住は、前日1週間、アルバイト前など生活基盤のサポートや安全の補助等、生活基盤作りに関するもの。
	—	アルバイト	アルバイトをしないと留学生活は続けられない、社会の学校や社会に慣れ、より条件の良いアルバイトを探して働く。
	—	アルバイト	アルバイトをしないと留学生活は続けられない、社会の学校や社会に慣れ、より条件の良いアルバイトを探して働く。
	—	アルバイト	アルバイトをしないと留学生活は続けられない、社会の学校や社会に慣れ、より条件の良いアルバイトを探して働く。
	—	アルバイト	アルバイトをしないと留学生活は続けられない、社会の学校や社会に慣れ、より条件の良いアルバイトを探して働く。

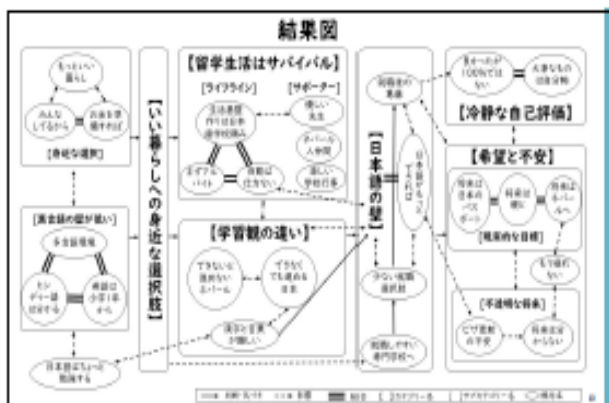
20

概念・定義・カテゴリ・サブカテゴリ			
カテゴリ	サブカテゴリ	概念	定義
日本語の壁	—	就職しやすい専門学校へ	日本語学校の卒業後は、就職しやすい専門学校や専門学校を志す、日本語を向上させて大学や専門学校へ行く機会が増えたり、自分の興味や能力を活かせるという機会がある。
	—	少ない就職競争	日本人や専門学校の出身者、同じ国籍、少ない競争から就職しやすさ、英語流暢な日本語力に足りないこともあり選択している。
	—	日本語がもっとできれば	日本語がもっとできれば今の状況は違っているのでは、という思いがある。
	—	就職先の確保	就職先を確保する必要がある、親や親戚からサポートして就職先を確保する、就職先を確保する必要がある。
	—	就職先の確保	就職先を確保する必要がある、親や親戚からサポートして就職先を確保する、就職先を確保する必要がある。

21

概念・定義・カテゴリ・サブカテゴリ			
カテゴリ	サブカテゴリ	概念	定義
希望と不安	—	就職しやすい専門学校へ	日本語学校の卒業後は、就職しやすい専門学校や専門学校を志す、日本語を向上させて大学や専門学校へ行く機会が増えたり、自分の興味や能力を活かせるという機会がある。
	—	少ない就職競争	日本人や専門学校の出身者、同じ国籍、少ない競争から就職しやすさ、英語流暢な日本語力に足りないこともあり選択している。
	—	日本語がもっとできれば	日本語がもっとできれば今の状況は違っているのでは、という思いがある。
	—	就職先の確保	就職先を確保する必要がある、親や親戚からサポートして就職先を確保する、就職先を確保する必要がある。
	—	就職先の確保	就職先を確保する必要がある、親や親戚からサポートして就職先を確保する、就職先を確保する必要がある。

22



23

ストーリーライン(要旨)

ネパール人元日本留学生は、親戚や友人に日本留学経験者が多く【いい暮らしへの身近な選択】として日本へ留学する。多言語環境で育つネパール人にとって異言語の壁は低い。留学前に日本語はちょっと勉強するだけである。渡日後の【留学生活はサバイバル】で、日本語学校による生活基盤作りのサポートやアルバイトが欠かせない。先生やネパール人仲間等に支えられて留学生活に奮闘する。学習面ではネパールと日本の【学習観の違い】もあり、日本語力を向上させることができないことも多い。これは、進学、就職時に【日本語の壁】へつなげていく。留学生活を経え日本でも生活する中で、彼らは日本留学について概ね良かったものの100%ではないという【冷静な自己評価】をする。将来は、ビザ更新の不安等もあるが、日本のパスポートを取りたい、或いはネパールへ帰りたい、親と一緒にいたい等、其々の現実的な目標を持ちつつ、【希望と不安】が入り混じった思いを抱いて日本で生活を送っている。

24

8. 考察と結論

- ✓ 日本留学は【いい暮らしへの身近な選択肢】であり生活と直結。
- ✓ 留学理由に日本文化や日本語への興味等は殆ど見当たらない。
- ✓ ネパールの学校は【できないと進めない】一方、日本は【できなくても進める】。この【学習観の違い】をどう乗り越えるか。
- ✓ 多くがヒンディー語や英語等、自然に第二言語を身に着けた経験はあるが、日本語は初めてゼロから学ぶ外国語。より良い学びのために日本語学校が持つ役割は大きい。
- ✓ 進学に必要な日本語力についての適切な情報提供が重要。
- ✓ 思い描いた生活とのギャップに困窮する留学生へのケアの検討。

25

9. おわりに：

彼らに接する教師として今後も考えたいこと

- ✓ 「日本語教育の参照枠」※でも指摘される「生涯にわたる自律的な学習」の促進
- ✓ 留學生活の充実と進路選択肢を広げるための取り組み
- ✓ ミャンマーやスリランカ等、他国の留学生の課題
- ✓ 就労目的のネパール人の課題
- ✓ 女性留学生特有の課題

26

10. 主な参考文献

- 研究報告 (2015) 「日本留学に訪れるネパール人学生の現状とその課題～福岡県高校に通うネパール人学生へのインタビュー～」『教育実践研究』第18号、pp.179-182
- 水野直子 (2003) 「グローバル化とアジアの未来：東アジアへの新しい視点」『東洋学』第55号、pp.1-12
- 水野直子 (2007) 「アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第59号、pp.1-12
- 水野直子 (2010) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第62号、pp.1-12
- 水野直子 (2011) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第65号、pp.1-12
- 水野直子 (2012) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第68号、pp.1-12
- 水野直子 (2013) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第71号、pp.1-12
- 水野直子 (2014) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第74号、pp.1-12
- 水野直子 (2015) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第77号、pp.1-12
- 水野直子 (2016) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第80号、pp.1-12
- 水野直子 (2017) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第83号、pp.1-12
- 水野直子 (2018) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第86号、pp.1-12
- 水野直子 (2019) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第89号、pp.1-12
- 水野直子 (2020) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第92号、pp.1-12
- 水野直子 (2021) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第95号、pp.1-12
- 水野直子 (2022) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第98号、pp.1-12
- 水野直子 (2023) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第101号、pp.1-12
- 水野直子 (2024) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第104号、pp.1-12
- 水野直子 (2025) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第107号、pp.1-12
- 水野直子 (2026) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第110号、pp.1-12
- 水野直子 (2027) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第113号、pp.1-12
- 水野直子 (2028) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第116号、pp.1-12
- 水野直子 (2029) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第119号、pp.1-12
- 水野直子 (2030) 「東アジアの未来：東アジアの未来研究」『東洋学』第122号、pp.1-12

27

ネパール人留学生にとって

日本留学とは何か

～元留学生へのインタビュー分析からの一考察～

ご清聴ありがとうございました。

文化科学研究科 人文学プログラム

田所 瑞絵

28

あとがき

「私の課題発表会」は、放送大学で学ばれた方々が実践したこと、調査したこと、研究したことなどを発表していただく貴重な機会となっています。放送大学で学んだ方が、諸先輩達の実践、調査、研究への真摯な姿勢に接して自らの学びの成果をどんどん発表できる場として「私の課題発表会」があることを同窓会会員をはじめ学生の方に積極的に周知していきたいと思います。さらに、多くの方に学び成果をより身近に感じていただきたいと考えています。また、この会を放送大学で学んだことだけでなく、放送大学卒業後に地域に根ざした研究成果を発表する場所として、また「私たちの地域の学会」として充実していくために、「研究し、論文を書き、発表する場」を放送大学在学の方々と卒業された同窓生の方々のために継続して発展させていく事が私たち同窓会の使命ではないかとその重みと責任を感じています。

この要旨集を今後の研究に役立てて、皆様のそれぞれの体験や研究にとって、糧となるようにと願うとともに、この機会に、来年、再来年の「私の課題発表会」に向けて、皆様の研究や生涯学習をなお一層深められて、多くの方が発表してくださる事を願っています。

最後になりましたが、一つ一つの発表についてコメントして下さった客員教員の先生や細部に亘ってご協力下さった放送大学群馬学習センター所長、事務長、職員の方々に心から感謝申し上げます。

2025 年 3 月 8 日(土)

2024 年度 私の課題発表会

放送大学群馬同窓会
放送大学群馬学習センター

令和 7 年 3 月 8 日 発行

編集 放送大学群馬同窓会

発行者 簗輪 欣房



The Open University of Japan

My Research Project Presentation **2024** Abstracts

Nature and Environment Course, Department of Liberal Arts, Faculty of Arts and Sciences, The Open University of Japan

Kyoko Masaki

Graduate School of Cultural and Social Sciences, The Open University of Japan,
Department of Cultural and Social Sciences, Human Development Science Program

Takashi Saito

Humanities Program, Department of Cultural Sciences, Graduate School of Cultural Sciences, The Open University of Japan

Mizue Tadokoro